

ルネサンスにおける流転と形象——アルベルティからジョルダノ・ブルーノまで

岡本源太（岡山大学）

パノフスキーによれば、大鎌をもった有翼の老人の姿であらわされる「破壊者」としての時間「クロノス」は、ヨーロッパのルネサンスに生み出された概念だという。またルネサンスになると、西洋の古代から存在していた「カイロス」という一瞬の「好機」を示す時間概念が、気紛れに変転する「運命」の女神「フォルトゥーナ」の形象に駆け込んでしまう。これらの新しい時間概念は、一見したところではむしろ、現世の虚しさを説く中世以来のキリスト教的発想と親和的であるように思える。けれども実は、万物の流転に対する新しい感受性がルネサンスに登場したことを示唆しているだろう。それをもっとも明瞭に見て取れるのが、おそらく政治とならんで、美学の領域である。かのジョルジョ・ヴァザーリの『芸術家列伝』（初版 1550）からして、運命の変転のためにやがて芸術が滅びるかもしれないという危機にあらがって書かれた。時間のうつろいとともに関係が破壊されていくことへの意識は、ルネサンスの初期から後期にいたる美学と芸術論のうちに顔を覗かせている。この観点から本報告では、初期ルネサンスのレオン・バッティスタ・アルベルティ（Leon Battista Alberti, 1404-1472）と、後期のジョルダノ・ブルーノ（Giordano Bruno, 1548-1600）に眼を向ける。

周知のようにルネサンスは激動の時期であり、15世紀前半のアルベルティと、16世紀後半のブルーノとでは、背景にある文化状況も社会情勢もまるで異なり、その思想も一見して遠く隔たっている。アルベルティの『絵画論』（1435）や『建築論』（1443-52）は、これまでときに数学と理性にもとづく合理主義美学の先駆と見なされ、対するブルーノの『英雄的狂気』（1585）は、直観と狂気にもとづく天才美学の鼻祖として語られてきた。とはいえ、アルベルティの『モーモス』（1443-50）やブルーノの『カンデライオ』（1582）などの喜劇作品にとりわけ顕著なように、両者の思想には陰鬱な世界観が通底している。現実の時間のなかでうつろい、永遠不変の確実なものなどなにか一つないが、人間社会はそのことに気づかずに虚妄と欺瞞でみずからを塗り込めているというのである。

このとき芸術は、虚構を築き上げる点で、まさしく虚妄と欺瞞の最たるものだ。しかし、アルベルティは「装飾」の観点から、ブルーノは「紐帯」の観点から、この虚妄と欺瞞たる芸術が同時にその最良の治療薬でもあることを示唆する。のみならず、アルベルティは絵画を旧態依然の哲学にとってかわる知の在り方として称揚し、ブルーノは真の哲学と真の絵画が根底において同一だと主張しさえする。万物の流転をまえにした形象化活動としての芸術は、ルネサンスにあって、いかなる根拠にもとづいてこうした新しい地位を与えられるにいたったのか、それを本報告で再考したい。